

# わが国の四肢長管骨・骨盤骨折診療の現状

～RODEO(Rosai Orthopaedic trauma Database for Exploratory Outcome) studyより～

独立行政法人労働者健康安全機構 横浜労災病院 副院長／運動器センター長 ● <sup>みかみようじ</sup>三上容司

わが国の四肢長管骨骨折・骨盤骨折診療の現状を把握するため、全国の労災病院を中心とする9施設を対象に症例登録研究を行った（RODEO study）。

登録された症例は、四肢長管骨骨折・骨盤骨折で手術が行われた患者1,231名（2016年11月～2018年7月）で、年齢は18-65歳（平均46.7歳）、性別は、男性760例（61.7%）、女性471例（38.3%）であった。

受傷機転としては、転倒がもっとも多く、交通事故、転落・墜落がこれに次いだ（図1）。

部位別では、下腿が最も多く、前腕、大腿がこれに次いだ（図2）。

閉鎖／開放骨折の明らかな1,380骨折中、閉鎖骨折は1,184骨折（85.8%）、開放骨折は196骨折（14.2%）であり、開放骨折のGustilo-Anderson分類別割合を

図3に示す。

受傷後1年で骨癒合の有無を判定した462骨折のうち429骨折（92.9%）が骨癒合したが、33骨折（7.1%）は骨癒合しなかった。受傷後3か月以内にSSI（Surgical Site Infection）が確認されたのは476骨折中14骨折（2.9%）であった。

受傷後1年の復職状況を確認できた300例を対象に、復職に関連する要因を検討した。復職に影響する要因を単変量解析で絞りこみ、復職を評価項目としてロジスティック回帰分析を行ったところ、正規雇用であることに正の相関、年齢57歳以上、肉体労働、開放骨折に負の相関があることが判明した。

骨折患者の復職や両立支援への取り組みの参考になる。

図1. 受傷機転 (n=1,224)

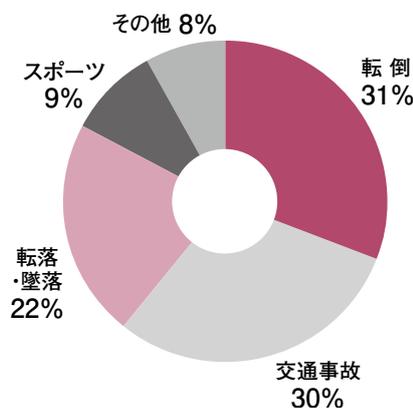


図2. 骨折部位別割合 (n=1,379)

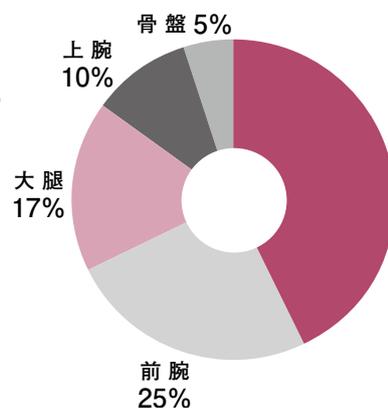


図3. 開放骨折のGustilo-Anderson分類

